

論文の和文要旨 (4000 字)

論文題目	満洲語文語における形態と音韻について — 『満文金瓶梅』を中心に—
氏名	結城 佐織

<本稿の目的と構成>

本稿は、17世紀前後の満洲語で書かれた文献を主たる資料とし、満洲語文献の形態と音韻に関する研究を行うものである。満洲語には膨大な文献資料が存在し、満洲語の先行研究は、異なる時代の複数の文献を利用したものが多い。しかし17世紀以降満洲語は急激に衰退していくなどの理由により、文献資料により文字表記が異なる。このため、複数の文献を同じように扱う研究では、文字の変化が通時的変化を表しているのか、共時的な異形態であるのかが判断できず、音韻研究としての精密度に欠ける。

本稿は、第一章から第四章までの全364ページから成る。複数の文献研究による弊害を極力避けるため、本稿は、全百回、約五万行あまりの翻訳小説である『満文金瓶梅』を研究の主軸に据え、17世紀の共時的な満洲語の形態と音韻を明らかにすることを目指したものである。

<第一章 序>

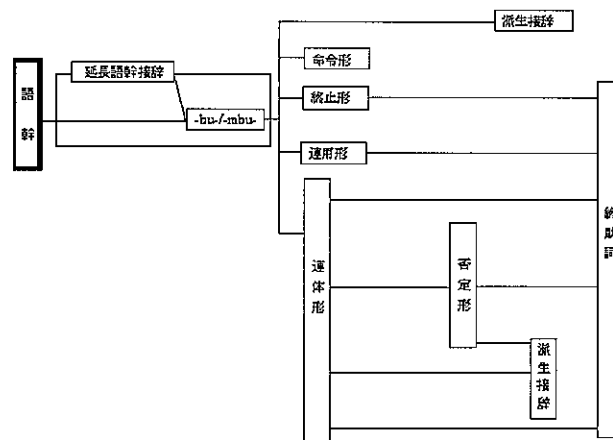
第一章は、現在の満洲語を取り巻く状況と、満洲語文語の音韻研究を支えている、他言語の文献について述べた。『満文金瓶梅』は17世紀の文献である。文献言語の音韻研究をするにあたり、満洲語音を漢語や朝鮮語、日本語などで記した文献を提示し、他言語文字で書かれた文献も、満洲語文献の音韻を推定する核となっていることを示す。

また近年、ツングース諸言語の記述研究も進み、現在のツングース諸言語の詳細な記述研究は、満洲語文献の言語学研究に多大な影響を与えている。このように満洲語文献の音韻研究は、さまざまな言語、角度から検討されていることを示し、更に満洲語文献の研究が、ツングース諸言語の言語研究へ貢献できるものであることも述べている。

<第二章 語の形態>

第二章は、動詞の構造を中心に、語の形態について考察する。満洲語は動詞語幹に接辞が後続していくいわゆる膠着語であり、動詞の活用が認められる。

膠着語と分類される言語でも、言語によって接辞の順序は異なる。第二章では満洲語の動詞の形態に注目し、動詞の活用形として命令形、終止形、連用形、連体形を立て、活用形の後にはどのような形態が後続しうるのか、あるいは接続制限を受けるのかを実例から検証した。更に、延長語幹接辞、受身・使役・自発の接辞、アスペクトなどを認め、動詞語幹に聯用される形態素の順序を示した。



また満洲語には、通時的観点からは動詞形成接辞と認められる接辞が複数ある。しかし他の品種の語を動詞化する際に、どの動詞化接辞を接続させればよいのか、意味の面でも音韻の面でも全く予測できないのでは、17世紀の共時態として見た場合、もはや生産的な接辞とは言いがたい。よって本稿では、漢語借用の側面から、接辞 -i は依然として動詞形成接辞として生産的であると認め、更に共時的観点により、17世紀の接辞 -i 以外のかつての動詞形成接辞は、すでに語幹の一部とみなすべきであると主張し、満洲語に gisur-{話す}などの n 以外の子音語幹動詞を認めた。

更に満洲語には、eyen{流れ}/eye-{流れる}, sain{よい}/saiš-{嘉する}のように、語幹に -n が接続し、名詞や形容詞を形成するとする研究がある。しかし cinggiya/cinggiyan{狭い, 浅い}のように、同じ単語であっても語末の n は脱落、もしくは付与されることがある上、aga{雨}/aga-{雨が降る}のように、-n が付与されないことがある。よって音節構造・語構造の両側面から、接辞 -n は共時的には名詞形成接辞、形容詞形成接辞としての機能は果たしていないことを指摘する。

<第三章 音素と音節>

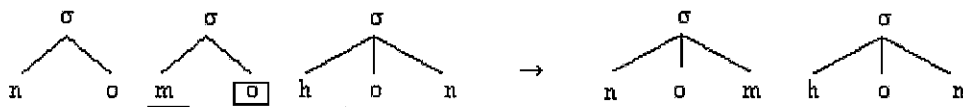
第三章は、音素と音節について述べている。母音文字は a, e, i, o, u, ū の6文字である。文字列 Vo である io, eo, oo, ao のうち、文字列 oo の基底形は、長母音 /o:/ や /au/, /ou/ であるとしたり、発音は[o:] [au] [ow]であるとする研究者もおり、文字列 oo の基底形については議論の分かれるところである。本稿では、文字列 Vo について、音声面では、諺文転写や漢語音訳表記、三家子満洲語から、音韻面では母音調和と語構造に注目し、文字列 Vo の o の発音は, [u], [w], [o], [ɔ] のいずれかであることを指摘した。

更に、huwelen ⇔ heolen{怠る}, tuwedenjemi ⇔ tedenjemi{転送する}という音位転換の例がある。本稿では、この音位転換について、次の四つの可能性を挙げる。第一に、huweの方が古い形式で、hu.weで二音節の場合、第二に、huweの方が古い形式で、huweで一音節の場合、第三に、heoの方が古い形式で、he.oで二音節の場合、第四に、heoの方が古い形式で、heoで一音節の場合である。この四つの可能性を検証した結果、文字列 eo の第二母音 o は、基底で /o/ ではなく、/u/ もしくは /w/ であることが確実であり、huwe は一音節であるという結論を得た。満洲語の文献資料において、音節構造にまで触れた研究は画期的であると考えられる。

また、文字列 oo には次の四つの形式があると纏めた。第一に、boofun/bofun{包み}のような異表記、第二に、gaihoo{受け取ったか}のような疑問の終助詞 -o の添加、第三に、loo{牢}のような漢語借用の満洲語表記、第四に、moo{木}のような二重母音、もしくは、単母音連続である。第三章では、この四つの形式について考察を行い、文字列 oo の基底形に長母音 /o:/ を認めない立場を主張した。

第三章では、満洲語の中性母音についても言及している。文字列 oCu, uCo, oCa, aCo, oCe を調査したところ、母音 u は単語内では母音 o と共起できるが、語幹内では共起できないことが明らかになった。つまり単語内で形態素境界を挟んでのみ、母音 u と o が共起できるという制限があるのである。更に、母音 a と o, a と u の共起関係においても、母音 u と o とほぼ同様であると指摘する。このことから、語幹母音 oo の基底形は /ou/ もしくは /ow/ であると言え、/au/ の可能性を排除した。

最後に、満洲語の音節構造について、満洲語の基底形は CVCV が基本であるという仮説を提示している。満洲語の母音はその音節構造によって、母音が削除されやすい位置があることを指摘する。nomohon/nomhon{忠実な}を例に挙げると、最も削除されやすいのは、(C)V.CV.CV(C)の環境で、第二音節の初頭子音が共鳴音である時の第二母音である。



この結果から、本稿は満洲語の基底形は CVCV が基本なのではないか、という立場に立つ。この立場は主に、yebcungge/yebecungge{美しい}という単語があった場合に、挿入母音の種類が予測できず、母音削除が行われたと考えるのが妥当であるという見解に寄っている。この見解は、満洲語の音韻構造からの結果であるが、更にツングース諸言語との比較からも、満洲語では CVCV 構造が本来的なのではないかと提唱する。

例えば、満洲語は umhan{卵}であるが、ネギダル語では umukta である。ある古い時代の満洲語の基底を /umuktan(～umukta)/ と仮定すると、満洲語において *umuktan → *umuhan → umhan{卵} という過程が成り立つのである。語中の文字上の音節末としては、k, b, s, t, l, r, n, m, ng が立つが、17世紀の共時的観点から見て、文字上の音節末の後に母音が仮定できるものがある。また古い文献との音韻変化の面や、他のツングース諸言語との比較により、文字上の音節末 k, b, s, t, l, r, n, m, ng の後に母音が仮定できるものがある。このことから本稿では、音節末の子音には n しか立たないという制約は、満洲語の音節構造全体に共通するものであったとの結論に達する。

<第四章 母音調和>

満洲語に母音調和があることは知られている。しかし満洲語母音調和規則に関して、満洲語の母音調和は崩れているということを除けば、研究者によって満洲語の母音調和に関する見解は一致しない。満洲語の母音調和について議論の中心となるのは、基底母音数と素性の設定、母音調和の体系、母音調和の範囲の三点である。

語幹において、母音 a, o, ū は母音 i, u と共起でき、母音 e は母音 i, u と共起できるとされている。だが文字の共起関係からでは、語幹がすべての母音と共起できる母音 i, u のみの場合、接辞の母音を予測できない。しかし、母音 i, u のみで構成されている語幹の接辞は、-Ca, あるいは -Ce になり、更に同じ語が接辞 -Ca を取ったり、-Ce を取ったりするなど、ぶれる事がない。つまり、語幹の母音 i, u が、実は /i, u/ と /i, u/ であるとするならば、基本的に満洲語の母音調和は崩れておらず、美しい体系であることを指摘する。

満洲語の接辞における母音調和は、大きく分けて接辞 -rA₃ と接辞 -rA₃ 以外に二分できる。接辞 -rA₃ では、接辞の直前の母音が調和誘因範囲となるため、共時的にはもはや同化であると考えられる。よって満洲語の接辞 -rA₃ 以外の母音調和は、以下のようになる。

1. 調和誘因範囲：語幹（延長語幹を含む）
 - a. CVCVCV - CV
2. 母音調和の母音グループ
 - a. +narrow (i, e, u)
 - b. -narrow (a, o, i, u)
3. 母音調和規則
 - a. 調和誘因範囲が +narrow であれば、+narrow 接辞 (-Ce/-Cu) になる
 - b. 調和誘因範囲が -narrow であれば、-narrow 接辞 (-Ca/-Cū) になる

本稿の母音調和に関する見解は、語幹の母音が中性母音のみで構成されている単語に関しても、説明できる。便宜上 narrow を N で表すと、以下のようになる。

- | | | |
|--------------------------|---|-------------------|
| 1. ji - hA ₃ | → | ji - he {行った, 来た} |
| +N αN | | +N +N |
| 2. isi - hA ₃ | → | isi - ha {抜いた} |
| -N, αN αN | | -N, -N -N |

本稿では、満洲語の母音調和が崩れているといわれる理由として、次の三点を挙げる。第一に、母音体系が7母音から6母音になった点、第二に、母音の narrow 素性が母音調和に関与しなくなりつつある点、第三に、基底の母音調和現象から、表層の同化現象に移行している点である。本稿の考察から、満洲語はかつて7母音であったが、『満文金瓶梅』の時代では6母音であり、形態素にかつての素性 narrow の情報が残され、母音調和の規則の例外となったとの結論を得る。

以上全四章で得られた共時的見解を基に、本稿では満洲語の通時的変遷にも言及している。本稿は満洲語の音韻・形態の研究にはもちろんのこと、ツングース諸言語、更にアルタイ諸言語の音韻・形態の研究に貢献できるものであると期待する。